

## 六条御息所造型の方法について

—生靈事件を中心に—

武原弘

六条御息所は、はやく生靈となつて葵上をとり殺し、のちには死靈となつて紫上や女三宮を苦しめ、そのことを通して源氏自身の運命にまで深くかかわり続けた人物である。当時、物の怪は民間信仰として一般的に信じられており、この物語にもその出現場面は多いのであるが、その物の怪が正体を明らかにされ、しかもそれが特定個人の怨靈として規定され、物語の情況のなかで生き生きと形象化されるといふのは、六条御息所の場合にのみ特異のあり方で、注目されるのである。御息所の人物造型に當つて、物語作者は、なぜ、どのような方法によつて、物の怪という特異な媒体を用いたのか。「葵」巻の生靈事件を中心に、そうした問題について、私の視座から検討を加えたい。すでに、多くの先学によるすぐれた論考があるので、それらに十分学びながら、物語本文に即しての考察を進めたい。

「夕顔」巻の冒頭「六条わたりの御怒び歩きのこと」(1—20九頁)が、六条御息所の初登場を告げるが、ここでは「六条わた

り」の女が誰なのか、その身分や素姓はいつさい明らかでない。物語がやや進んで、「御心ざしの所」(1—21六頁)との敬語待遇の表現があり、その女の高い身分がほめかされ、さらに、「齢のほども似げなく」(1—22一頁)と叙せられていて、女が源氏よりも高令であることも示唆される。「いとどかくつらき御夜離れの寝ざめ寝ざめ、思ししをるる」(同)は、女の身辺情況に関する短い報告なのであろう。このような叙述を通して、六条の女が存在は徐々に暗示されてくるのであるが、それはきわめておぼろげな輪郭だけであつて、彼女はまた、影のような不確かさの中にいる。この巻の物語が、源氏と夕顔とのゆくりない恋のゆくえを主想にしているので、作者はいま、六条の女に関わる暇をもたない、というのであろうか。

しかしながら、この女の性格(人柄)に関する描写は、この巻でかなり密度の高いものになっているのが注意される。「木立前栽など、なべての所に似ず、いとどかに心にくく住みなしたまへり。うちとけぬ御ありさまなどの、気色ことなる」(1—22一頁)、「とけがたかりし御気色を、(中略)いとものをあまりなるまで思

六条御息所造型の方法について —生靈事件を中心に—

ししめたる御さまにて」(1)―(1)二二一頁)、「あまり心深く、見る人も苦しき御ありさま」(1)―(1)二三七頁)などの叙述によつて、高貴な趣味を持つ、深くものを思いつめる、内向的な女の性格が、はやくも鮮明に型どられつつある。これは、他方において源氏が耽溺しはじめた女夕顔の「ひたぶるに若び」「いとあてはかに児めかし」(1)―(1)二二七―二三〇頁)い、従順なその性格と明らかに対置されていて、両者は、いずれもこの巻の物語に必然の人物形象ではあるだろう。

ところで、身分や素姓を明らかにしないまま、性格(人柄)ばかりを物語世界に突出させるがごとき方法による人物造型とは、いったいかなる意味をもつものなのか。古代の物語において、人物の身分や素姓は、存在の本質的基盤を規定する必須条件で、性格はその上部にある付加条件であると言ふことができよう。前者を欠いて登場する人物は、必然的に、実在感が乏しく、観念的である。性格が観念的であるという意味以上に、存在の形式そのものが観念的なのである。ここでの「六条わたり」の女は、そのような存在のあり様を示すのであろう。彼女は、いつも同じような表情をして(ある観念の具象化)、神出鬼没(観念的存在形式)の登場のし方を可能とされたことになる。この巻で、なにがしの院に現われた物の怪の正体は曖昧ではつきりしないが、それが六条の女であり得る条件はそろっていると考えられることもできる。

ともあれ、後の六条御息所像の原基はこのようなものである。物語は進み、「葵」巻に至る。その巻頭に近い条に、

まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫宮齋宮にゐたまひ

しかば、(下略) (2)―(1)二頁)

と叙せられて、彼女の身分がはじめて明らかにされる。すなわち、故前東宮(桐壺院の弟宮と考えられる)の妃六条御息所で、新齋宮姫宮の母。後文に「故父大臣」が「限りなき筋に思し心ぎして、いつきたてまつりたまひし」(2)―(1)二九、八五頁)娘としての、その出自が語られている。この巻以降の物語に、彼女についての「六条御息所」という呼称が一貫的なのは、前東宮妃という高貴の前身を重んじた作者が、それを彼女の人物像の根基として固持したがためである。なお、御息所の年令については、「賢木」巻につきのように明記されている。「十六にて故宮に参りたまひて、二十にて後れたてまつりたまふ。三十にてぞ、今日また九重を見たまひける」(2)―(1)八五頁)。年令では、この巻で源氏は二十三才、御息所とは七才の年令差がある。が、「桐壺」巻で朱雀院が立坊したのが源氏四才のときのことなので、ここでの御息所についての年令記述と矛盾する形となる。はやくから、この物語の構想上、成立上の問題として論議されてきたのであるが、定説は得られていない。右の叙述のすぐ後に、「齋宮は十四にぞなりたまひける」(同)とあるので、この記述に重点をおこうとした作者に、御息所に関する年令設定上の思いちがいが生じたのであろうか。ともあれ、このように描かれて、六条御息所はいよいよ本格的に、舞台の前面にその全貌をあらわしてきたことになる。読者にとつて、彼女はもはや影ではなくなり、まさしく実像となりつつあるのである。

ここで、私が注意したいことは、六条御息所に、娘齋宮を除いて、ほかに在存する唯一人の近親縁故者さえいない点である。大臣

という権門の家筋に生い立ちながら、父方についても母方につけても、頼るべき親族の一人をもたないという彼女の孤独な境涯は、不自然と詭めなくもない。しばしば論ぜられるように、あるいはかつて御息所の夫君前坊の身の上に廃太子問題が起き、故父大臣家はその政変にまきこまれて失脚、没落し去ったのであろうか。本文に記述がない以上、その問題は想像に委ねるほかはないのでいまはさておくとして、ここで重要なのは、御息所はいま権門の出自から切り離れて、あるいは切り離されて、孤立無援の単独者としてその全貌をあらわしたことに留意することである。作者は、彼女の存在を徹底的に個として、単独者として規定しているのである。彼女が後に、生霊や死霊などの物の怪になることが、このことと無関係ではないので、ここにも作者の人物造型上の周到な用意が見られるとしたい。

## 二

六条御息所は、源氏の愛情の冷却するのを歎いて、娘齋宮と一緒に伊勢へ下ってしまおうかと思案する。そのことを知った桐壺院は、御息所に対する源氏の軽々しい扱いを難じ、厳しい訓戒を施すが、「齋宮をもこの皇女たちの列になむ」(②―一二頁)思う院だけが、かつての高貴な身分を誇りとする御息所のただ一人の理解者、支援者であると言えよう。過去に、二人の恋愛関係を推測する先学もある。源氏としても、御息所を忍ぶ情事の相手として扱うのを気の毒にも、心苦しくも思うが、「まだあらはれてはわざとでもなしきこへたまはず」(②―一三頁)、態度保留のままである。こ

六条御息所造型の方法について ― 生霊事件を中心に ―

こで、「あらはれてはわざとでもなし」とあるのは、御息所との公然の、正式の結婚を意味しているのであるが、葵上が存在している以上、それはできない相談とでも言うべきところで、彼はいま窮地に追い込まれつつある。

御息所もまた進退を定めかねた。身を退くべしというのが理性的の指示であっても、源氏への愛執を断ち切るには心細く、また世間からの嘲笑もつらいだろう。悩みは深まるばかりである。

こうして物語は、源氏を中心にしての葵上と六条御息所の葛藤の図を構え、そのクライマックスとも呼ぶべき生霊事件へとつき進むのであるが、そこでの御息所は、観念としての存在様式、単独者としての存在形式を根基とするその素像を、どのように大きく増進させてくるのか。

生霊事件について考察するまえに、まず、その発端となった、新齋院御禊の日の車の所争いの一件について吟味しておきたい。いま、事の顛末を詳細に辿るのは省略に従うことにして、私の視点から、問題の要点を捉えなおしてみたいと思う。

この日、物見車の立所のこと、葵上方の従者たちが御息所方の車を強引に押し退け、乱暴をはたらき、御息所に屈辱を与えたというのが、争いの概要である。現象面だけを見れば、祭の酒勢がひきおこした、従者同志のささいな集団暴力事件というものにすぎない。が、この背景には、時の権勢をほしのままにして傲る左大臣家とすでに没落してしまった御息所の父大臣家との、かつての権力闘争の残影が見える。後、葵上にとりついたおびただしい物の怪のなかに、「故父大臣の御霊」(②―二九頁)がいたことで、そのことは

確認される。当時の民間信仰にあった御霊信仰とは、つまり「陰險な政治闘争の犠牲になって死んだ人間の怨念が祟るといふ思想」<sup>(註)</sup>で、「栄華物語」や「大鏡」などでも知られるように、この時代の物の怪は、多くの場合、こうした政治的怨恨である。思うに、件の車争いは、そうした政治貴族間の家と家との対立、集団と集団の抗争事件であつて、もとより葵上や御息所の個人的意志や責任にかかわるところのものではなかつたはずである。しかるに、事件はここで、いちはやく葵上と御息所の源氏をめぐつての確執として本質転換され、とりわけ、御息所個人の「いみじうねたきこと限りなし」<sup>(註)</sup>とすゝる内なる情念の世界に収斂せしめられようとする。「年ごろはいとかくしもあらざりし御いどみ心を、はかなかりし所の車争ひに人の御心の動きにけり」<sup>(註)</sup>、「はかなき事のをりに、人の思ひ消ち、無きものにもてなすさまなりし御認の後、一ふしに浮かれにし心鎮まりがたう思さるる」<sup>(註)</sup>、「三〇頁」などの叙述によつて、この小さな事件が、プライドの高い御息所をいかに深く傷つけたか、その屈辱感がいかに大きかつたかが知られるのである。一件について聞き及んだ源氏の反応に注目したい。身分も教養も低い従者たちの所業なので、車の主である当人に責めを負わせようとは思わない彼であるが、

「(葵上は)ものに情おくれ、すぐすくしきところつきたまへる(中略)、御息所は、心ばせのいと恥づかしく、よしありておはするものを、いかに思しうむじにけん」<sup>(註)</sup>、「二〇〇―二一頁」と、あらためて二人の女の性格(人柄)を思いくらべている。事件の原因は、あたかも両人の性格のちがひにあるかのごとき源氏の思

量である。権門間の政治的対立は、またもやここで完全に、個としての女の性格上の対立葛藤、嫉妬心の問題へと転移された。かくて、「源氏を中にした女の執念ともいふべき激しい愛情の争ひ」<sup>(註)</sup>の物語が、これから急速度で展開していくことになる。

御息所の物語に関する限り、作者は際だつた個別化、個性化の方法を持統集中するのを知ることができるのである。

さて、問題の生霊事件について。

車争いの一件以来、六条御息所は「ものを思し乱ること年ごろよりも多く添ひ」、「御心地も浮きたるやうに思されて、悩ましろ」、「よろづいとうく思し入れ」<sup>(註)</sup>、「二四―二五頁」るようになった。さきにも触れたように、あの日の屈辱感は鎮めがたく、あまつさえ葵上は懐妊し、院をはじめとする世のあまねく人々から大事に見舞われているという噂を耳にしては、御息所の胸中は穏かではない。彼女の「もの思ひ乱れ心地」<sup>(註)</sup>、「二七頁」は、しだいに激しい嫉妬、敵愾心、憎悪の感情となつて内に昂じ、やがて怨念の権化――生霊となつて、葵上にとり憑く。

左大臣邸の一室で、出産を控えて苦しむ葵上に物の怪が正体を現わす場面は、臨場感にあふれ、迫真力に満ちた名描写で知られている。葵上と御息所と物の怪とが、二重写し三重写しされて源氏に迫るその表現の効果は絶妙と称讃するほかないものだが、そのすぐれた描写方法についての吟味は割愛するとして、私はいま、問題をつぎの二点にしばつて、事件の本質を把握することに努めたい。

第一点。葵上に正体を現した物の怪が、いかにも人間的で、生ま

怪は怨靈なのであるから、狂暴で、悪魔的なイメージを伴うのが一般であろう。実際、御息所自身の夢のなかには、葬上の髪をつかんで引き倒すなどする狂暴な鬼女になった己れの姿を見る。が、いま源氏の前に現われた物の怪は、狂暴でもなく、怨言さえも吐きはしない。むしろ、「身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへ」(②―三三三頁)と助けを求め、哀しげに歌を詠む。

なげきわび空にみだるるわが魂を結びとどめよしたがひのつま(同)

愛する源氏への未練をこめた御息所の詠出にはかならない。

思うに、御息所は、自ら好んで生霊になったわけではなかった。たしかに、源氏への愛執は断ちがたく、またその正妻葵上に対する嫉妬の情は抑えがたかった。が、「身ひとつのうき嘆きよりほかに人をあしかれなど思ふ心もなけれど」(②―二九頁)と、理性によって自重しても自制しても、「もの思ひにあくがるなる魂」(同)が勝手に肉体を遊離し、物の怪となって悪事をなすのをどうすることもできない。御息所は、そのようなわが身を「うとまし」「罪深うゆゆし」と、深く歎いている。そのような醜悪な己れの姿について「人の言ひ思はむこと」(②―三六頁)の恥ずかしさは、自尊心の強い彼女には耐えられないものであるにちがいない。「宿世のうきこと。すべてつれなき人にかで心もかけきこえじ」と思し返せど、「思ふものを」なり」(②―三〇頁)との心理描写によって、御息所の内界における理性と情念との激しい葛藤が克明にたどられ、その精神の苦闘の果ての生霊事件なのである。

すなわち、理性によってはいかにしても抑制できない情念のした

六条御息所造型の方法について ― 生霊事件を中心に ―

たかさ、無意識の深層にまでぬきがたく巢くう女の悪魔性Ⅱ執念と、御息所は自ら必死に闘った。作者がそれを人間存在の根源にまでさかのぼって追求するとき、人物御息所は作者にとって、いたわるべき己れの自画像に近づいていたのではないだろうか。しかも、御息所が身をおいて正妻葵上と源氏の愛を争いあわねばならぬその情況とは、まぎれもなく、当時の一夫多妻制の矛盾がもたらす「女の社会悲劇」の縮図にほかならず、御息所の苦悩と悲歎は、まさしくその犠牲者の魂のそれとして、作者の深い共感と同情と呼び寄せられるものではなだろうか。人間的な物の怪という、類まれな形象の創出され得た所以なのである。

第二点。ここでの物の怪が源氏一人にのみ正体を現わす理由はなにか。葬上の口を借りて、物の怪は泣きながら言う、「大将に聞ゆべきことあり」(②―三三二頁)と。そこで、左大臣も大官も、ほかのすべての者が退室し、源氏一人見守るなかで、葬上は御息所に変身する。源氏の見た物の怪の正体は、源氏一人の心の世界の存在者であって、それ以上のもではありえないのである。

物語の作者紫式部にとって、物の怪の実は信じられていたのであろうか。「紫式部日記」中に、彰子中宮の敦成皇子出産にかる物の怪出現の場面が描かれている。「今とせさせ給ふほど、御物怪のねたみののしる声などのむくつけきよ」(一六頁)以下の叙述によれば、物の怪を客観的な事実としてとらえていた、と理解できる。が、しばしば引用されるように、「紫式部集」中の歌に見られる式部の物の怪観はそうではない。

絵に、物の怪つきたる女のみにくき図書きたる後に、鬼にな

りたるもとの妻を、小ぼうしのしぼりたる図書きて、をとこは経読みて、物の怪責めたるところを見て

亡き人に託言はかけてわづらふもをのが心の鬼にやはあらぬ

返し

ことわりや君が心の闇なれば鬼の影とはしるく見ゆらむ

すなわち、式部にとつて、物の怪とは「心の鬼」――気のとがめ、良心の苛責の作用によつて生じる幻影にすぎない。近代的とさえ言われる、科学的合理的の世界認識によるのである。こうした物の怪観によれば、いま源氏が見た物の怪は、彼の御息所に対する「心の鬼」――誠意を欠く冷淡な己れの態度への悔悟反省、良心の苛責におののく源氏が見る幻覚現象ということになる。そのような「心の鬼」としての物の怪なればこそ、それは源氏一人の目にしか現われ得ないものでなくてはならなかつたのである。

こうして、御息所の苦悩と悲歎は、源氏ただ一人の「心」の世界に封じ込められてしまった。彼女は、源氏における具体的現実世界に直接的にコミットし得ない存在なのである。想起するに、彼女はいつも、「まことや、かの……」という発語を伴つて物語の飛び飛びに登場することが許されていた。源氏における「反世界側」から、物の怪という非現実の媒体に身を変えて、ひそかに源氏の「心」の世界に侵入してくる、「無気味でもあるが哀れげ」な人物である。

以上を要するに、この物語で、御息所生霊事件は、一夫多妻制の下で女が自己の全存在をかけて闘わねばならない嫉妬の問題をま正面から主題として掘えたのであるが、それを人物の性格あるいは個人心理の世界に収斂させて方法化していくところに、この物語の固

有のすぐれた達成があるのであり、またその限界もあつた、ということになるだろう。

### 三

「葵」巻の後半は、葵上の急逝を悼む源氏、左大臣家の近親者ほかの人々の深い悲歎を描く。そこには、実に十四首もの哀傷歌が並記されて、深まる秋の情趣を背景に、それぞれの人々の哀悼の情意が綿々切々と、きわめて抒情性豊かに詠出されていくので、印象の深い名場面となっている。それらの哀傷の犬いさ、深さは、いうまでもなく葵上に寄せられた人々の愛情のそれであり、彼女の生前の存在の大きさ、重さでもあろう。右の十四首の哀悼歌のうち、源氏の詠歌が九首にもぼっているのが印象に残る。思えば、源氏と葵上の夫婦関係は、確かに冷え冷えとしたものであつた。が、葵上の死の直前において、彼ははじめて夫婦としてのあたたかい真情の交流、愛情の高潮を知見することができて、女の手をとつて涙したのであつた（「葵」(2)―三二―三三頁）。その涙がそのまま、葵上葬送、哀悼のそれに変らうとは、源氏にとつて慰めようのない悲傷ではあつた。彼の歌を一首だけ引用して掲げたい。

限りあれば薄墨ごろもあさきけれど涙ぞそでをふちとなしける  
(2)―四二頁)

顧るに、六条御息所は、生霊となつて、出産という肉体の痛みのなかにいる葵上にとり憑き、これを殺した。これを事件と呼ぶにけつして不当ではないのである。

源氏は、葵上の急死を悲歎すると同時に、御息所の生霊と直に



見を述べ、小論のまとめとしたい。

御息所は、生霊となつて源氏の正妻葵上をとり殺し、結果、源氏と紫上の結婚を成立せしめた。この物語の主構想が紫上物語の展開におかれているのを読み進めるとき、かつて池田龜鑑氏が高説されたごとく、御息所は「葵の上を強いて排除する」という不幸な宿命を負わされて登場する。「負わされている役割はあまりに不自然」な人物ではある、と認められよう。ただ、彼女の存在が源氏の人生に与えた影響——その意味の重要性には、十分留意しておきたいのである。前節にも触れたように、葵上の突然の死は、源氏を深い悲傷と悔悟の淵に沈めた。彼は、いまに至つてはじめて自己の過去の生涯を省察すると同時に、葵上の生の愛しさと重さを哀惜したのである。御息所の生霊は、彼に女の性の執拗さ、おぞましさを教えた。すべての「世」を「うし」と観じ、彼は出家をさえ希望している。さらにまた、左大臣邸に身をおいて、子に先立たれた親の悲傷の痛切さをもわれとわが身に共感し、人の世の哀しさを理解する人間性の深長さをも獲得しているはずである。かつて六条御息所の生霊・死霊の全体像について深く考察された多屋頼俊氏が、「これわ源氏の人格お完成してゆくために極めて大きな働きおしているのである。即ち源氏わこの不幸に依つて、いよ／＼深く正しいものお体得しつゝ、世俗の世界から高い宗教の世界えと、向上の一路お迎つて行かれるのである。この点から見ると、御息所わ光源氏お完成させるために、光源氏をしていよ／＼光あらしめるために、是非とも必要な存在である」と卓説され、あるいは西郷信綱氏が、「『もの怪』として発動し、光源氏の妻たちを次々にうちのめすことにな

っているのは、例の「あやしき癖」をもち、色好みと愛——仏教的には邪淫——の世界への妄執に生きる光源氏という神話的主人公が、自己否定を通して宗教的完成に達する道程」と高論されているのが、いま想起されるのである。この論考ではとりあげなかつた御息所死霊事件まで含めて考察するならば、そのことはいっそう明瞭に看取されてくるのである。

ここで、このように重要な役割を担う御息所の人物造型に當つて、作者が用いた方法は物の怪というきわだつて特異な媒体に拠るものであつたことは既に見てきたとおりなのであるが、その方法に託された作者の意図が最終的に問われなくてはなるまい。

御息所の生霊事件は、端的に、源氏を中にしての葵上と御息所との愛情の争い、三角関係のもつれから現象したもので、一夫多妻制が確固として存続していた当時、こうした女たちの確執葛藤は、作者にとつて身近な現実の問題でもあつたであろう。例えば「蜻蛉日記」の作者の場合のように。すなわち、野村精一氏の論ぜられるごとく、「御息所の形象は明らかに社会的な拮据の上に造型されたものであることが判る。この一夫多妻制がもたらした女の悲劇としてそれは見とられる」のである。作者は、己れもまた自身の現実として苦闘しながら生きているこの社会矛盾に対し、痛切な批判精神を投射して、御息所生霊事件を物語にとり込んだものに相違ないのである。

ただし、それを描くときの式部の方法は、必ずしも直截的ではなかつた。既に見てきたように、式部は問題を、畢竟、個としての人間の問題として凝縮し、個人心理の問題に収斂させることによつ

て、これを人間の最も根源的な内面の情念の世界のものとして追求することができたのである。そうした方法が採用された主な理由は、おそらく、物語の主人公（光源氏）の理想性があくまで守り通されなくてはならない、当時の物語創作上の定型法に従うところに求められるのであろう。さらに加えては、社会的問題や矛盾を、人間存在の根源にまでさかのぼって追求しようとする作者の世界認識、人間認識の独自のスタイル（思考型式）がこれに関わってきているのである。「紫式部日記」でも顕著なのは、式部が他者に批判的でありつつも、その批判の視線は直ちに反転して、自己自身の内部に深く向けられ、つねに自照的・自己回帰的に思考する傾向を示す点であり、六条御息所の人物像にも、そうした式部自身の思考型式が確かめられるところとなった。

このように考えて、六条御息所は、物語の作者式部の分身としての一面を賦与された。一夫多妻制のもとで、激しい嫉妬心とそれを抑制しようとする理性との間で自己分裂を遂げてしまった御息所とは、その痛ましい犠牲者のほかの何者でもない。作者は深い同情を寄せつつ、狂気を生きる女六条御息所を追い求め、それは彼女の死後の世界まで及んでいったのである。

さらにいえば、六条御息所の物の怪の物語とは、嫉妬に狂い、生きながらにして魂あくがれてさ迷い、死してなお救済を得られない過去の、あるいは同世代の朋友としての彼女たちに対する、式部の鎮魂の物語でもあったに相違ないのである。

注1 「(御)物怪」の用例は、全体で五十例を見る。

2 齊藤暁子「葵巻における六条御息所の造型について」(『源氏物語の研究』教育出版センター昭54所収)

3 川崎昇「六条御息所の信仰背景」(『国学院雑誌』昭42・9)、三谷栄一「源氏物語における民間信仰」(『源氏物語講座』第五巻、昭46)ほか多数の論考に説かれる。

4 西郷信綱「源氏物語の『ものけ』について」(『詩の発生』昭39所収)

5 『日本古典文学全集源氏物語②』(小学館)の頭注による。

6 野村精一「『源氏物語』の人間像・六条御息所」(『源氏物語の創造』昭44所収)

7 小林美和子「複線型叙述の物語構造に於る効果」(『国語と国文学』昭50・12)

8 注5に同じ。

9 池田亀鑑「物語文学」(至文堂、昭43)

10 多屋頼俊「源氏物語の思想」(法蔵館、昭27)

11 注4に同じ。

12 注6に同じ。

なお、「源氏物語」本文の引用は、『阿部秋生、秋山虔、今井源衛校注・訳 源氏物語』(小学館)により、「紫式部日記」「紫式部集」は、ともに岩波文庫本によった。